

氏 名	傅 建 良
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（言語コミュニケーション文化）
学 位 記 番 号	甲言第 6 号（文部科学省への報告番号甲第338号）
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位授与年月日	2010年 7 月31日
学 位 論 文 題 目	<b>The Present Perfect in English: From Semantic, Evolutionary, and Contrastive Perspectives</b>
論 文 審 査 委 員	（主査）教 授 神 崎 高 明 （副査）教 授 八 木 克 正 教 授 大 高 博 美 山 本 英 一（関西大学大学院教授）

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文において、傅建良氏は、意味論、文法化及び対照言語学の視点から英語の現在完了形の本質を究明することを試みている。本論文は7つの章からなっている。

まず第1章では、現代英語の現在完了形に関連する先行研究を紹介し、問題点を指摘する。この章では現代英語における時間、テンスとアスペクトの基本概念を紹介したうえ、現在完了形についての先行研究を次のように整理している。①現在完了形の意味の図形化、②現在完了形の indefiniteness と definiteness、③現在完了形と定時過去副詞（adverbials of definite past）との共起、④現在完了形の current relevance の解釈、⑤ indefinite past 説、extended now 説及び embedded past 説の紹介、⑥ situation type と viewpoint の相互作用から見る現在完了形の意味。また今までの先行研究では未解決問題としてあった現在完了形の temporal structure の図形化、定時過去副詞との共起から見られる現在完了の変化は何か、current relevance はどう解釈するべきか、現在完了形の have の脱落現象などを取り上げている。

第2章、第3章では、文法化の視点から英語、中国語及び日本語の現在完了形（あるいは現在完了に相当するもの）を比較して、3言語に共通する普遍性を見出そうとしている。第2章では、英語を取り上げ、have の文法化過程及び現在完了形の意味変遷という2つの視点から、英語の現在完了形の特徴を通時的に探っている。まず、助動詞 have の文法化の過程を分析し、その結果、「「存在」を表す本動詞から完了アスペクト辞へ」の変化という文法化の現象が見られたことを指摘している。次に現在完了形の意味の変化に基づき、その発展を次の4段階にまとめている。4段階に分ける基準は現在完了形の意味的焦点（semantic focus）が現在か、あるいは過去かに置かれるかであるとする。第1段階は have が「持つ」の意味で使用され、have + NP + past participle の語順をもつ古英語の時代、第2段階は have + past participle + NP という語順が確立された14世紀から、現在完了形と過去の意味の相違が厳密に区別された18世紀初期まで、第3段階は18世紀初期から現在に至る段階、第4段階は現在完了形がいろいろなルートを通して現在中心から過去中心になると予測される段階である。そして傅氏は現代英語の現在完了形は第3段階と第4段階の間にあるという仮説を立てている。

第4章では英語の完了助動詞 have の文法化過程が中国語の完了アスペクト辞「了」(le) と日本語の完了アスペクト辞「ている」の文法化にも応用できるかどうかを検証する。中国語の「了」(le) はこれま

で「完了」を表す本動詞「了」(liao) から発展してきたと言われてきたが、「了」(le) の否定形と「経験」を表すアスペクト辞「過」(guo) 等の視点から、「了」(le) も英語の have と同じように、「存在」を表す本動詞から発展してきたことの証明を本章で試みている。日本語においては「ている」の「いる」は動くものがどこかに存在しているという意味を表す本動詞である。その「ている」が古典日本語の完了アスペクト辞「つ」、「ぬ」、「たり」と「り」の後に発達し、現代日本語の完了アスペクト辞の一つとなっている。このように、日本語でも、「存在」を表す本動詞から完了アスペクト辞への発達が確認された。したがって、英語・中国語・日本語の3言語において、「存在」を表す本動詞から完了アスペクト辞への文法化という共通の現象が見られる。

第4章から6章では現在完了形の完了・結果・経験用法に焦点を当てて、特に1970年代以降、英語の現在完了形がどのように変化しているか、また今後の変化の方向を文法化の視点から明らかにしている。これらの章において、傅氏は現代英語の現在完了形が現在を表す用法から過去を表す用法へ発展していく現象を詳しく観察している。これには、いくつかの証拠が見られる。既に指摘されているアメリカ英語においては現在完了形の代わりに過去形が多用されるという事実のほかに、少なくとも次の3つの証拠が考えられる。1つ目は現在完了形の current relevance の拡大した解釈としての過去時制代用としての使用、2つ目は現在完了形が定時過去副詞と共に起る傾向、3つ目は現在完了形における完了助動詞の脱落現象である。

第4章では、英語の現在完了形が現在を表す用法から過去を表す用法へ発展していく現象を詳しく観察している。その1つとして現在完了形の current relevance の拡大した解釈としての、現在完了の過去時制における使用である。

(1) Einstein has visited Princeton.

この文は、通常 Einstein が生きている間にだけ正しい文とされるのが一般的見解であるが、現在完了形の current relevance が拡大解釈され、Einstein が死んだ後でも、すなわち通常過去形を用いる場合でも、その代わりに現在完了を用いる場合がある。傅氏はこれを現在完了の拡大解釈と呼んでいる。

第5章では英語の現在完了形が現在中心から過去中心へ発展していく方向を証明する2つ目の根拠を検証している。すなわち、本章ではイギリス英語における現在完了形が定時過去副詞 (adverbials of definite past) と共に起る現象を検証する。これまで、現在完了形と yesterday や last week などの定時過去副詞とは共に起ないと言われており、それらは performance error あるいは afterthought としてのみ扱われてきたが、本章では、改めて、現在完了形と定時過去副詞との共に起が可能であることを、文法化の視点、拡大した current relevance の影響、ヨーロッパ言語の影響、語用論的な影響、形態的な影響など様々な観点から論じている。

第6章では、英語の現在完了形が現在中心から過去中心へ発展していく方向を証明する3つ目の根拠である完了助動詞の脱落現象を分析している。Engel & Ritz (2000) は以下の(2)のように、過去形が過去分詞と同じである動詞 finish を用い、現在完了形の漸次変容 (cline) を示している。

(2) (a) I have finished. > (b) I've finished. > (c) I finished.

しかしながら、Engel & Ritz (2000) においては、(c) が過去形であるか、完了助動詞の脱落かについては未解決のままである。傅氏は過去形が過去分詞と同じでない19の動詞を用い、「主語+過去分詞」の例を集め、完了形について、次の(3)のような変容があることを示している。

(3) (a) I have seen it. > (b) I've seen it. > (c) I seen it. (現在完了形) > (d) I seen it (過去) > (e) I saw it.

第7章では英語の現在完了形の「未完了」用法(継続用法)を対照言語学の視点から検証している。英語の現在完了の用法は多様であるが、「現在までの状態もしくは習慣」を表す「継続用法」は、ほとんどの研究者によって取り上げられている (Quirk *et al.* 1985等)。同じ CP (continuative perfect) でありな

がら、時間幅を表す副詞 TAD (temporal adverbial of duration) と BT (Boundary Theory) から見ると、完了形の継続用法にもいくつかの用法があることが分かる。この章では CP を更に CP<sub>1</sub>、CP<sub>2</sub>、CP<sub>3</sub>の3種類に分け、実例に基づき、英語、中国語、日本語の3言語の相違を踏まえ CP の実態を探っている。

次の(4)のように、CP<sub>1</sub>では TAD が行為あるいは状態の開始点である B<sub>1</sub> (B = boundary) から終了点である B<sub>2</sub>までの期間を指し示し、この間に状態が均質であり、変化が一切見られない。

(4) I have been away in India for several years,

CP<sub>2</sub>では、(5)のように TAD が CP<sub>1</sub>と同じ時間幅を表すが、TAD 期間内で動作の繰り返し (iterativity) を示し、多重的 (multi-phased) な事態となっている点が、CP<sub>1</sub>と質的に異なっている。

(5) I've taught in this school for ten years.

CP<sub>3</sub>は CP<sub>2</sub>のバリエーションとも言える用法である。傅氏はその代表的な動詞として die を取り上げる。Die のように通常 B<sub>1</sub> = B<sub>2</sub>を意味する動詞は英語では、(6)のように通常容認不可能である。この文を容認可能にするためには、英語では(7)のように書き換える必要がある。

(6) \*He has died for three years.

(7) He has been dead for three days.

ただし、(8)のように主語が複数形になった場合には容認可能になる。

(8) People have died for years.

この場合、B<sub>1</sub> = B<sub>2</sub>の特性をもつ die から、B<sub>1</sub> ≠ B<sub>2</sub>の特性をもつ die に意味が変化したため(8)が容認可能になったと考えられる。CP<sub>3</sub>の動詞に関して、中国語や日本語では、その振る舞いが英語とは異なっていることも指摘されている。

## 論文審査結果の要旨

本論文は英語の現在完了形の本質を意味的に分析した優れた研究であるが、もっとも特徴的なことは、英語の現在完了を古英語から説き起こし現代英語に至るまで通時的な観点から詳細に分析している点である。傅氏は Elsness (1997) の現在完了に関する3段階説を独自に改良した4段階説を提案する。

(1) Stage 1 (Old English-): present > past (現在中心)

Stage 2 (14<sup>th</sup>-18<sup>th</sup>): present < past (過去中心)

Stage 3: (18<sup>th</sup>-present): present > past (現在中心)

Stage 4: present < past (過去中心)

第1段階の古英語の時代は、have + NP + past participle の語順の時代であり、過去よりも現在を指向していた。第2段階の14世紀になると、再分析 (reanalysis) が起こり、have + past participle + NP の語順となる。そして、現在完了形は yesterday のような定時過去副詞 (adverbial of definite past) と共起し、現在よりも過去を指向していたと考えられる。第3段階の18世紀になると、現在完了が定時過去副詞とは共起せず、過去形との区別が明確になる時期であり、現在完了は過去よりも一層現在を指向するようになる。傅氏によれば、英語は第3段階から徐々に第4段階に入りつつある。この仮説は、かなり大胆な仮説である。しかしながら、その兆しが確実に英語の一部に見られることを続く各章にてコーパスから様々な例文を挙げることによって例証しており、傅氏はこの仮説を立証することにほぼ成功している。

この仮説を立証するために、傅氏は3つの例を挙げている。1つ目は、現在完了形の current relevance の拡大用法、2つ目は、現在完了形の定時過去副詞 (adverbials of definite past) との共起、3つ目は、英語の現在完了助動詞の脱落現象である。

第4章では、英語の現在完了形が現在を表す用法から過去を表す用法へ発展していく現象の1つとして

現在完了形の current relevance を取り上げている。

(2) Einstein has visited Princeton.

この文は、通常 Einstein が生きている間にだけ正しい文とされるのが一般的見解であるが、Einstein が死んだ後でも、すなわち通常過去形を用いる場合でも、その代わりに現在完了を用いる場合がある。傅氏はこれを現在完了の拡大解釈と呼んでいる。確かに、この現在完了は過去を表す用法とも言える。しかしながら、主語が Einstein のような著名人ではない場合も current relevance の拡大解釈が可能かどうかは疑わしい。主語が有名な Einstein だからこそ現在でも影響力があり、その結果、過去形でなく、現在完了が用いられているという説明も可能であろう。

第5章では、英語の現在完了形が第3段階の現在中心から第4段階の過去中心へ発展していく方向を、特にイギリス英語における現在完了形が定時過去副詞と共に起る現象から検証する。従来、現在完了形と yesterday や last week などの定時過去副詞とは共起しないと言われており、それらは performance error あるいは afterthought としてのみ扱われてきたが、改めて、現在完了形と定時過去副詞との共起が可能であることを論じている。特に、この現象は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語にも見られる現象であり、このようなヨーロッパ言語の英語に対する影響もあるのではないかと、傅氏は指摘している。実際、傅氏の挙げるドイツ系アメリカ人の話す “It has been rebuilt just six months ago.” のことばなどから、ドイツ語の転移 (transfer) が起こっている可能性がある。

第6章では、英語の現在完了助動詞の脱落現象を分析することによって、英語が第3段階の現在中心から第4段階の過去中心へ発展していく方向を指摘している。傅氏は過去形が過去分詞と同じでない19の動調を用い、「主語＋過去分詞」の例を集め、完了形に関するコーパス資料に基づいて、次の(3)のような漸次変容 (cline) があることを示している。動詞は一例として see を使用する。

(3) (a) I have seen it. > (b) I've seen it. > (c) I seen it. (現在完了形) > (d) I seen it. (過去) > (e) I saw it.

傅氏によれば、現代英語では(a), (b)の用法が正用法であるが、(c), (d)のような用法も、話しことばのレベルでは増えつつあるとする。傅氏は、現在、話しことばでは、(c)のような現在完了の意味で使用する “I seen it recently.” の用法や、さらに進んで(d)のような過去時制を表す “I seen it years ago.” (BNC) のような方法も生まれているとする。Seen が過去時制を表すことは、それが “I seen it yeas ago, didn't I?” のように、過去を表す助動詞が付加疑問に使用されていることから確かめることができる。傅氏は、この事例が、英語が第4段階に入っている証拠と考える。この章で使用したコーパスは、英国のBBCの放送英語とUKの話しことばのコーパスおよび米国のLKLコーパス(ラリーキングライブ)である。その結果、I/You done は50例(英国コーパス)、5例(LKLコーパス)であり、I/You seen は18例(英国コーパス)、28例(LKLコーパス)という数字がでている。これらの数字は、偶然とは言えないものであり、これらの用法が口語レベルで使用され始めていることを確かに裏付けている。したがって、この章では現在完了助動詞の脱落現象に関して優れた分析がなされているといえる。

ただし、傅氏の提案する(3)では、“I have seen it.” は、“I seen it.” という中間的用法を経由して、最終的に(e)の “I saw it.” に変容していくように書かれている。しかしながら、“I seen it.” は I have seen it.” の方言あるいは口語体として存在するのであり、“I seen it.” を経由して(e)の “I saw it.” の表現に変容していくことはないであろう。その意味で、(3)の漸次変容は、(e)を削除し、次のように書き換えたほうがよいであろう。

(4) (a) I have seen it. > (b) I've seen it. > (c) I seen it. (現在完了形) > (e) I seen it. (過去)

なお、I seen it の変異形として、“He has rang last night.” や “I have know....” の例で、have + 動詞の過去形のボタン、have + 動詞の単純形のボタンを挙げているが、これらは、変異形というよりも、performance error か単なるコーパスの入力ミスと考えたほうが自然であろう。

第7章では英語の現在完了形の「未完了」用法（継続用法）を対照言語学の視点から検証している。この章ではCP（continuative perfect）をCP<sub>1</sub>, CP<sub>2</sub>, CP<sub>3</sub>の3種類に分け実例に基づき、英中日3言語の相違を踏まえCPの実態を探っている。B<sub>1</sub> = B<sub>2</sub>の特性をもつdieから、B<sub>1</sub> ≠ B<sub>2</sub>の特性をもつdieに意味が変化したため容認可能になったと考えられるという指摘など、興味深いのが、これまでの章の内容との関係性をもっと明確にすべきであろう。

副題に対照的観点（contrastive perspectives）にあるように、英語を中心に議論を進めながらも中国語、日本語に見られる同様の現象も取り扱っているところにもこの論文の独創性が見られる。ただし、中国語、日本語に割いている分量が意外に少ないところが気になるところではある。しかしながら、このことが、本論文の価値を決して損なうものでないことは明らかである。本論文が基本的に扱っている研究対象言語は英語であり、英語の現在完了に関する新しい知見に溢れる論文であり、現在完了に関する優れた研究であることは論を待たない。

以上、審査員4名は傅建良氏の論文を慎重に審査し、7月23日に行った口頭試問の結果を併せて協議した結果、傅氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するに相応しいものであると判断するに至り、ここに報告するものである。